

# カナダの歴史と

## アイデンティティ

世界経済調査会

大原祐子



公立図書館で一カ月ほどのリサーチを

するため、オタワに滞在したことがある。オタワ大学で紹介して貰った下宿は文書館から歩けば十分ばかりの、美しい並木道の奥の大きな家であった。離婚した仏系カナダ婦人が経営していて、彼女自身の子供が四人とおよそ十人の下宿人が毎夜同じ食卓を囲んだ。下宿人の顔ぶれは、アジア系が中国人物理学者と私、他はケベックから来てオタワ大学に学ぶ女子学生二人、ハンガリー出身だというドレス・メーカーにつとめる垢抜けた婦人、レバノンからイギリスを経由してカナダに来たばかりで職探しをしているという女性、両親はアメリカ在住だというユダヤ人、女主人のボーイフレンドとおぼしきカナダ人など、日本からカナダへ行って九カ月目の私が、その多彩さに驚かされるに充分な顔ぶれであった。

人々は非常に親切だったが、とりわけ私が感激したのは、英語が下手であることに深甚なる理解と同情を示されたからである。プリティッシュ・コロンビアでは人々は英語の出来ないことに同情し励ましてはくれたけれども、カナダに住む人は誰もが英語が喋れて当然という雰囲気であった。オタワでは英語の下手なことが理解された。ケベック州では英語が出来なくて当然、とされる(但しフランス語が出来なくてはならないが)。

### 独自の国家達成への熱望

こうした多様なカナダ人を一体化しているきずなは何なのだろうか。歴史を勉強する者として、私にはそれは矢張り歴史的伝統の中に求めることが出来るような気がする。

カナダ史を学んでいて心うたれるのは、北アメリカ大陸に独自の国家を建設し、発展させたいとするカナダ人の意志の強さである。それは英国からの自治の達成とか、アメリカ合衆国への対抗意識を越えた、積極的な願望である。とくに近代カナダ国家の枠組を整えた、すなわちコンフェデレーションを達成した建国の父祖たちの燃えるような熱意を感じないわけにいかない。

カナダ史にはアメリカ史にみられるような魅力的な人物がいらない、と云う人がいるが、私はそうは思わない。建国の父祖に限ってみても、ワシントン、ジェファソン、フランクリン、ハミルトンらに匹敵するマクドナルド、カルティエ、ジョージ・ブラウン、A・T・ガルトといった豊かな人材があった。コンフェデレーションを達成したのは、こうしたカナダ中央部の勢力ばかりではない。ノヴァスコシアには、反コンフェデレーションの総師のごとくみなされるが、彼の協力なしにはコンフェデレーションが達成出来なかつたジョセフ・ハウがいた。遠くプリティッシュ・コロンビアには、僅か十余年のプリティッシュ・コロンビアにおける生活でありながらカナダ併合推進の立役者となつたジョセフ・トラッチャー、ノヴァスコシアに生れてカリフォルニアへ移住し、ゴールドラッシュの生活の中で同名の多いのに嫌気がさして改名した、との伝説をもつ連邦主義者、元W・A・スミスのアモール・デ・コズモ(何と魅力的な名を選んだことか!)がいた。

### 海から海へ

広大なカナダの国土を脳裏に描く時、コンフェデレーション達成の物語は何といても感動をよび起こさずにはいない。一八六四年八月、シャーロットタウン会議開催の三週間前になってはじめて、中央カナダから沿海地方への、政治家やジャーナリストによる交歓旅行が企てられたと云う。引率したのはやはり建国の父祖の一人に数えられるジャーナリストのトマス・ダルシー・マッギーで、彼らはモントリオールを出発し、まずグランド・

トランク鉄道でアメリカ、メイン州のポートランドへ出た。ポートランドから船でニューブランズウィックのセント・ジョンへ、そしてセント・ジョン川をフレデリクトンまで遡り、再びファンディ湾を横切つてウインザーからハリファックスへ、ノヴァスコシア政府直営鉄道で到達することが出来た。

一方、「海から海へ」の版図を完成させるために不可欠のプリティッシュ・コロンビアは、想像するだに気の遠くなるような彼方である。現在でも、汽車ならば乗りづめで丸三日間かかるヴァンクーヴァーからオタワまでの旅を、当時の人々は何のようにして行なつたのであるうか。ウィクトリアからオタワへ、カナダ政府との自治領加入条件について交渉に赴いたロバート・キャレル、トラッチャー、ジョン・S・ヘルムツェンの三人は、シアトルへ行き、合衆国のユニオン・パシフィック鉄道を利用して東へ向かつたらしい。手許にある資料では詳細は判らないのだが、一八七〇年五月十日に出発した彼らがオタワに到着したのは三週間余りのちの六月四日である、ということだから、その苦勞も偲ばれよう。

プリティッシュ・コロンビアが連邦に加入した一八七一年、プリンス・エドワード島に九万四千、ノヴァスコシアに三八万八千、ニューブランズウィックに二八万六千、ケベックに一一九万二千、オタワリオに一六二万一千、マニトバに二万五千、プリティッシュ・コロンビアに三万六千、総勢三七〇万人という僅かな人数が、果敢にも英国の保護を離れて一つの国家を作り上げようと決意したのである。アメリカ革命直後のアメリカの人